

コロンタイの恋愛論と転向作家達

——一九二〇年代後半の恋愛遊戯^{ラブ・ゲーム}

はじめに

ソヴィエトのアレキサンドリア・ミハイロワナ・コロンタイ女史の書いた『赤い恋』は、これは世界的ベスト・セラーとなり、九ヶ国語に訳された小説であるが、一九二七年、日本訳が世界社から刊行されるやいなや、『日本の讀書界はまだこの小説を受け入れるだけの準備が出来てゐないと云ふ意見が出たのであつた。だが、その時の私の話相手達が誤つてゐたことは、今では明白である。ほんの少時間前に上梓された『赤い恋』は、非常な歓迎を受けて、翻譯ものとしては稀らしい方の増版の必要を來したのである』という記述にもあるように、たちまちに版を重ね、大反響をもたらした。一九三〇年には七八版までいっている。(今日と出版事情が違ふこと、またメディアの規模も相違するため安易な比較はできないが、当時出版

された他の書物と比較しても、相当にはやいペースで版が重ねられているため、かなりの反響があつたことは確かであろう。)

当時二五万枚の大ヒットとなつた『東京行進曲』には、歌詞にまつわるいくつかのエピソードがあつたといわれている。市川孝一『流行歌にみるモダニズムとエロ・グロ・ナンセンス』(『日本モダニズムの研究』南博編、ブレーン出版)によれば、『四番の歌詞は、最初当時の学生の姿を描いて、長い髪して マルクス・ボーイ 今日も抱える『赤い恋』……となつていたそうであるが、これが共産党の第二次検挙(昭和四年四月一六日)直後であつたため、時のビクターの文芸部長が、当局を刺激してはいけないという配慮から作詞者西条八十に頼んで『シネマ見ましょか お茶のみましょか』を小田急で逃げましょか……と書き改めてもらったという。前出の『赤い恋』というのは、当時ベスト・セラーになつていたコロンタ

山下悦子

イの小説のことである。モボやモガほど一般的ではないが、マボ（マルクス・ボーイ）、エガ（エンゲルス・ガール）などという呼び名も当時あったそうである」とある。流行歌の歌詞にまで取り上げられるほどに『赤い恋』は、流行したわけであるが、長い髪をして、『赤い恋』を片手に歩くのが、当時のマルクス・ボーイや文学青年達の最先端のファッションだったことがわかる。

訳者松尾四郎は、『ロコンタイ女史について——譯者の言葉——』（一九二八・二・一〇）の中で次のように述べた。

『拙譯『赤い恋』の刊行が、ただに讀者大衆の熱心な歡迎を受けたばかりでなく、文壇人の間にさへ多大の反響を與へて、茲に増版を以つて讀者に見える事の出來たことは譯者の大きな喜びである。文壇行き詰まりの聲高き昨今、しかも廉價本圖本の洪水中にある今日の日本讀書界で、本書の刊行がかくまで大きな讀者の歡迎と、かくまで深重な文壇人の批判とを得ることが出來たのは、此の本元來の眞價によることは云ひながら、又かうした意味の本が如何に日本の大衆に要求せられてゐたかを示すものと云はねばならぬ。『本當の意味での新しい女性の新しい意識と感情——それこそ主人公ワツシリッサの具象化してゐるところのものである。』『新ロシアの新しい生活面。』『新しいロシアの新しい文藝』等々と批評家は云ふ。實にこの一篇は、新生活意識に燃える日本の女性大衆に、其の行方の曙光を明快に指し示した最初の調期的小説ではなかつたか！』

訳者の言葉にもあるように、ロコンタイの恋愛小説は當時の女性解放論者の女性のみならず、文壇の男性にまで大きな影響を与えた。『赤い恋』とならんで、『三代の恋——恋愛の道』『姉妹』は、恋愛三部作といわれるが、特に『三代の恋——恋愛の道』の女性主人公ゲニアが複数の男性と同時平行的に性愛關係を結ぶ『恋愛遊戯』が話題となり、賛否両論が飛び交い、大反響をもたらした。

たとえば、女性史研究家高群逸枝との間にロコンタイ論争を引き起こした作家林房雄は『新『戀愛の道』——ロコンタイ夫人の戀愛觀』（中央公論一九二八・七）というエッセイの中で「この歴史がかつて見ない新しい生活の中から、歴史がかつて知らない新しい心理、新しい感情、新しい道徳が生まれでるのは、當然以上の當然ではないか。新しい生活條件に適應しつつ、孤獨な鬭争を戦ひ續ける彼女達にとつては、祖母達が與へてくれた膨大な道徳律は、重荷であり邪魔である。數世紀の長きにわたつて教へこまれた『婦徳』、即ち受極性、無個性、溫順、優雅は無益であるばかりでなく、有害だ。苛酷な現實は、彼女達に、それと全く異なつた性質——動性、自己主張、決斷、大膽、これまでは男子のみの特徴であり特權であると見做されてゐたあらゆる淘汰によつて武装することを要求する。……現代の婦人は——自らの能力によつて勞働しつつある婦人は——すでに戀愛の分野に於いてもまた、男子によつて演ぜられる悲劇または喜劇の單なるわき役であることを止めた。今や彼女は自らを

演じなければならぬ新しい精神悲劇の勇敢な主人公である。」と述べ、ゲニアに象徴されるような、経済的に自立し、結婚制度に捉われることのない働く女性像を新しい女性の新しい生き方として絶賛した。林房雄のコロンタイの小説に対するのめり込み方に格別なものがあったことは、『三代の恋—恋愛の道』『姉妹』『恋愛と新道德』をすべて林が翻訳していることからわかる。

また武田麟太郎も、プロレタリア作家だった頃、この小説の影響を受けて『W町の貞操』という小説を文芸誌『1929』六月号に発表、恋多き新しい女を描いた。武田もコロンタイの恋愛小説に大きな影響を受けていることは、この作品を読めば、一目瞭然である。

コロンタイの恋愛三部作は、いずれも今や入手にくい書となっている。『赤い恋』は国立国会図書館にもなく、筆者は東京駒場の近代文学館所蔵のものを閲覧したが、それには高見順寄贈の印が押されていた。高見順もこの書を手に入れたことがわかる。

平林たい子、平塚らいてう、神近市子、高群逸枝、山川菊栄といった当時を代表する女性解放論者達はコロンタイの作品に関するエッセイを書いているが、女性達は「新しい女」と絶賛された主人公ゲニアに対し、批判的であるのに対し、先に紹介した男性作家達には好意的に受け入れられたという点で、いわば、評価が対照的となっているのが興味深い。特に当時プロレタリア作家でもあった林房雄や武田麟太郎が絶賛しているのが注目されるが、彼等が転向作家

として転向文学を描く一九三〇年代には、「新しい女」とは対照的な日本の伝統的な女性や母親像が描かれる変容ぶりを見ると、転向とは何かということの、別の視点からの考察の可能性をこれらの小説がもたらしてくれることは確かであろう。

一九二〇年代はアメリカ、ソヴィエトが政治経済的にも、文化的にも飛躍した時代であるが、職業女性が大量進出したアメリカでも、コロンタイの小説は話題となった。ニューヨーク・イヴニング・ポスト紙は「此の書中に現はれる人物はいずれも躍如としてをり、その描写は著者の確かな筆致を想はせ、又物語は現實をもつて人に迫る。」「ニューヨーク・サン紙は「コロンタイ女史は此の小説の中で、かねてから問題視されておつた、ソヴィエト・ロシアにおける婚姻関係、性道德、子供の扶養、及び婦人の家に對する責任の新しい秩序の描寫をしてゐる。」、ロスアンジェルス・レコード紙は「新ロシアにおける人間關係については、今日に至るも輿論の賛否は相半ばしてゐる次第であるが、此の書は實に新ロシアにおけるかうした人間關係の描寫をよく我々に示してくれた最初の小説である。」「ニューヨーク・レパブリック誌は、「此の書は實に面白い。荒削りそのままであり、勇敢な探求的な、盲目的な、しかも鋭く且つ少しも自ら幻滅を感じてゐない。」などと述べ、絶賛した。(『赤い恋』世界社巻末資料より引用)

『赤い恋』をはじめとするコロンタイの恋愛小説のこういった評価

は、期待される新天地、社会主義ロシアの女性像、男女関係、婚姻関係を描いたものとして全世界から注目されたが、一九二〇年代の産業の発展、近代的な都市空間の発達、モダンなライフスタイルの浸透等々に伴う女性のライフスタイルの変化と意識の変容という共通課題を有していたために、アメリカにおいても上記のように受け入れられたものと思われる。ドイツのチューリッヒ大学で学を修めた後、フランスポロニーヤ地方、パリ、アメリカと海外を放浪して歩き、一九一七年にロシアにてボルシェヴィキに所属、革命に参加、一九二二―二六年にかけてソヴィエトのノルウェー駐劄公使（世界ではじめての婦人公使といわれた）、引き続きメキシコ駐劄公使となるといったように女性としては国際的な視野を持ちうる、コロンタイ女史の経歴が、恋愛三部作に示された「恋愛遊戯」や家族関係のあり方をマルクス主義の枠組みの中で語りながらも、柔軟な感性を失うことのない描写に成功したのかもしれない。

日本でも関東大震災後は、拡大する都市空間、モダンなライフスタイル、多様な職種につく職業女性の進出がみられた。「モダン・ガールは、いはゆる新しき女ではない。もちろん女権擴張でもなければ、いはんや婦人参政権論者でもない。初めから男の奴隷などと思つてゐない。そして理屈も何も云はずに、男と同じラインへ出て一緒に歩いてゐる。（中略）一時代前の新しき女ノラは人間にならうとして努力したけれど、モダン・ガールは自ら既に人間である」

「モダン・ガールの出現」『女性』一九二四・八」と述べた北澤秀一の言葉に示されるようにモダン・ガールは大正末から昭和初期にかけての文化的象徴記号となり、男性知識人にもてはやされた。日本滞在中の外人の目にもこの期の日本女性の社会進出ぶりが際立ったものと映っていた。たとえば、露国極東大学教授イースバルヴィンは次のように述べている。

「婦人は、日本に於いても閉ぢ込めた生活から出たのだ。婦人たるの仕事以外に彼女達は現在男子と同様な澤山の職業を持つて居る。私はそれをここに枚擧しないであらう。それは餘りに周知の事である。（中略）日本でも婦人は、最近三十年間に一般生活の注意の中心となつた。婦人のみが考へられ、又婦人のみが論ぜられてゐるかと思はれる程である。企業家が何かを廣告しようとする時には必ず婦人を対象とする、廣告に婦人の姿を利用した商品で、人々の注意を惹かないものはない位である。これと並んで、量から云へば底の知れない婦人雑誌が發展した。」（『赤い戀』の増刷を聞いて）一九二八・一・二八

産業の発達、都市空間の拡大、メディアの発展、消費社会の現出、核家族の増加等々は、一九二〇年代においても平塚らいてうの「婦人の時代が來ました」「生命から見はなされつつある現代女性」一九二四」という言葉に象徴されるように「女性の時代」を現出させた。このような時代背景の中で「新しい時代の新しい女」の性生活の

あり様、家族、男女の関係を過激なまでに提示したコロンタイの恋愛小説は、様々な波紋を日本の知識人にもたらした。これらの小説——特に反響の大きかったゲニアの行為を基軸に、一九二〇年代後半の日本のあり様を探ることは、今日の「女性の時代」を考察する上でも重要であることはまちがいない。

2、コロンタイの恋愛遊戯

——『赤い恋』と『三代の恋——恋愛の道』について

それでは、まず小説の内容を簡単に紹介しておこう。『赤い恋』は、恋愛、同棲、解放の三部構成からなる長編小説である。主人公、二八歳の絹織物女工ワッシリッサは、共産党員であり、労働者評議員の委員として女工達からも尊敬されていた。「すべては社会の幸福のために、すべては革命の勝利のために」を信条とするひたすら真面目な女性というとなにやら堅苦しいイメージをいだくが、そうではない。彼女の恋人ウラヂミルは、固いカラーをつけ、ネクタイをきちんと結び、髪を奇麗に分けた「容姿のきれいな男」で「長い睫毛」のハンサム・ボーイであるが、「アメリカ人」「スパイ」「アナキスト」などとボルシェヴィキに真っ向から批判されている男である。「國家中毒者！ 集権主義者！ 奴等はまた警察制度を作らうといふのだ！」とボルシェヴィキを公然と批判するアナキストである。ウラヂミルは硬直化しつつある教条主義的な党に対し、

個人の欲望を全面肯定する生き方を自ら実行することにより、対決した。「若し君が従順に服従しないと云ふのなら、我々は君をソヴィエトから放逐する迄だ」とボルシェヴィキに宣言され、弾圧をされるが、党の模範生であるワッシリッサがたえず、かばいつづけてきたため、危機を脱してきた。

すべてに禁欲的で真面目な彼女は、全く対照的な「不良児」と激しい恋に陥り、二人は同棲をはじめた。おしやれで、ぜいたくで、個人の生活を大切にし、肉感的な女性と浮気をするプレイボーイでブルジョア的なウラヂミルに翻弄され、悩まされる。「自分の企業の利益の増進」や「家をいかにきれいに飾るか」について頭を悩まし、「ほくらはアメリカの労働者以下の暮らしをしなければならぬ。彼等がどんな生活をしてゐるかみるがよい。彼等はピアノを持ち、フォードの自動車とか自動自転車などまで持つてゐるぢやないか」と述べては、「民衆の幸福」を主張するワッシリッサの理論を「空論」と批判する。夫の言葉に、彼女は女性としてまた共産党員として頭を痛め続けるのであった。

やがてウラヂミルは貴婦人のように美しく着飾ったブルジョア的な女性と愛人関係に陥る。「美人といふ方ではない」胸の平たい、おしやれのひとつも知らないワッシリッサは、敗北感にさいなまれ別れることも考える。が、わがままな夫は、彼女に母をみいだすかのように甘え、許しを求める。愛人との関係を認めたものの、彼女

はもだえ苦しんだあげく、夫と別れることを決意する。愛人にルサンチマンを持つことなく、二人の幸福を祈り、郷里に帰って党活動に専念する。夫の子を宿していることに気づいても、未婚の母となることを決意、育児所の設立に邁進し、自立して力強く、明るく生きていくところで物語は終わる。

当時としては、夫婦の寝室の描写や性愛関係のシーンが大胆に描かれているため、伏せ字となっている箇所もある。それ故、コミュニストの接吻方法はどのように新しかったか、寝室の構造はどうであったかといったことが話題となったりした。平林たい子は「この書を、世の多くの、口紅と戀愛とより外に問題を持たないモダンガール、マダム諸氏、及び自分自身は最も進歩的なコミニストである」と自信しながら、女性に對してだけは實に古くさい考を持つコミニスト諸氏、及び女は「性慾の道具だ」とより外には女性に對して何の考も持ち得ない古い男達、及「男は女を食はすもの、愛撫してくれるもの」以上の考を持たない大人しい娘さん達、しとやかな奥様達にぜひおすゝめしたいのです。」(『文藝戦線』新年号・一九二八)と述べ、絶賛した。男一人に女二人の三角関係の泥沼を描いたものといえ、ありきたりの物語にすぎないが、この小説の新しさは、よくある三角関係において嫉妬に狂い、自傷を喪失する妻、あるいは忍従する妻、そして愛人と女同士、醜い争いをするといったような構図から逃れて、幾多の葛藤を経ながらも、夫から精神的に

も経済的にも自立し、結婚に未来を見出そうとしないワッシリッサの生き方にあるといつてよい。浮気や女遊びは男の甲斐性というところが正義とされるような時代にあつては、ワッシリッサの力強い生き方は多くの女性達の共感をかっただとしても当然であろう。このことは「この小説は人間の意志と感情との鍛練をくぐつて、最も光明的な社會生活への飛躍へ突き進んでゐる。その経路の自然さと力強さが、非常に新しい印象を與へます。」(『新文化』一九二八・四)といった外交官夫人内田すが子の感想にも示されている。

それに対しコロンタイの『三代の恋——戀愛の道』のゲニアは、男性知識人にはもてはやされたものの、女性達からは批判された。この書は、親子三代の戀愛物語を描いたもので、ゲニアは三代目にあたる。祖母も母親も、婚外交渉の実践者であり、「戀愛悲劇」を経験している。祖母は、両親に逆らつて戀愛結婚し、二人の子供にめぐまれて、幸せな結婚生活を営んでいたが、トルストイと文通をし、諸外国を見聞したこともある、当時としてはインテリ女性であつた彼女は、平穩な結婚生活に退屈していた。ある日、「チエーホフの小説から出て來たやうな、漠然とした理想主義、不安定な、不確實な、どことも知れぬ遠い未來に向けられた、ロシアのインテリゲンチヤのあの希望をもつてゐる男」(『戀愛の道』より引用)と出会い、恋に陥る。夫の憤怒と罵倒を当然浴びるが、「母として主婦としてだけでいいから家に留まつてゐてくれ」と哀願する夫をふりきり、

彼女は家庭を捨てて、男と結婚をする。そして仕事をしながら女兒（ゲニアの母親）を産んだ。ところが若い夫は、牛飼いの女と關係を持ち、妊娠させてしまう。祖母は娘を連れて家を出、「禁欲的だと思はれる位、つゝましやかな」母子だけの生活を営んだ。

祖母の娘、つまりゲニアの母親は「マルキストになり、やがて、石のやうに堅いボルシェヴィストになつた」。そして同志と同棲をするが、結婚はしない。非合法活動を行なつて逮捕され、追放地に残つた夫と別居中、ゲニアの母親は技師M宅へ家庭教師として住みこむ。やがて彼女は、美しい妻と五人の子供に囲まれて幸せな家庭生活を送る技師Mと恋愛關係となり、妊娠し、母の元へ帰郷する。

生まれた娘がゲニアであつた。両方の男性をそれぞれ愛してしまつた彼女は、どちらをも選択することができずに悩み続ける。ゲニアの父Mと結婚すべきだという母の意見に耳をかさずに、彼女は夫のもとへ戻ってしまう。だが、Mとも別れきれず、男二人、女一人の三角關係（Mの妻は何もしらないままに生活している）に悩まされるが、結局、両方と別れてしまう。

そして数年後、長い間別れて暮らしていた、成長したゲニアをひきとつて彼女の新しい若い夫と三人暮らしをするのだが、ゲニアが母親の若い夫と關係をもっていることがわかつてしまう。それどころか妊娠までしていたのだ。ゲニアに聞いただと、同時にもう一人の男性とも關係を持っていたため、父親はどちらかわからないと

いう。「自分も氣に入り、向かうも氣に入つた女と關係した」のだから別にふしだらでもなんでもない、覚活動と「二人の男と接吻したことの間に何の關係がありますか」とゲニアはクールな応対をするのだった。母親は自分の愛する夫と關係を持ったことを娘に非難すると、ゲニアは「彼の愛の一筋ほども私はあなたから奪つてゐません。……あなたが忙しくて、彼をキスする時間をまるで持つてゐないからです。それでもあなたは、彼をしつかりとあなたに縛りつけて、あなたの許しなしには楽しい眼を見てはいけなかつた」とのぞまれるのですか？ それこそほんとに汚ない所有欲です。」と述べるのだった。

妊娠についても、今でいうキャリア・ガールであるゲニアは、仕事の邪魔となるので、中絶するとあっさりと言う。「私達がお互ひに氣に入つてゐる間は私達はいつしよにゐます。だがさうでなければ互ひに別れます。誰もそれによつて損害を受けるものはありません。……私ももつと上手に妊娠から自分を守らうと思つてゐます。」といったゲニアの言葉に母親は驚き、思い悩む。「私にはまるで理解できない非人情、平氣さ、それは當然の權利だといひたげな確信……冷静な、落ちついた……まるで皮肉ではないかと思はれるやうな態度……。おわかりになりますか？ 戀でもなく、情熱でもなく、同情でもなく、かうした状態から抜け出ようとする責任感もなければ努力もない……すべてがさうあるのが當然だといふやうな、私だ

けが無理解で『時勢後れ』だといふやうな……』と母親は思い悩み、専門家に相談、意見を求める、といった筋書きである。

この書では、女性の婚姻外の交渉は当然の行為として受け入れられていること、異性に対する恋愛感情には未婚も既婚も関係がない、つまり結婚制度によって規定されるものではないということが前提となっている。だがそうであってもゲニアのような愛ぬきの性愛関係を全面肯定してしまっているものなのかどうかと母親は悩むのである。著者のコロンタイは新しい世界の新しい道徳としてゲニアのようなフリーラブを肯定しようとする。そこでゲニアの行為をめぐって、日本の文壇、女性解放の担い手達を中心に賛否両論、様々な意見が飛び交った。意外にもゲニアは女性達に評判が悪かった。当時のマルクス主義フェミニストの山川菊栄は、『コロンタイの誤謬』（二九二九）といったエッセイの中で、女性の性欲を一応認めただけで、次のように述べ、手厳しい批判を行なった。

「ゲニアが理論化し、道徳化しようとしているものは、本質においては、彼女がこれを共產主義と何らかの関連あるかの如く装い、この中に進歩的な任務をみようとする点である。（中略）かかる方法は、現代の女性が探るべき一般的な原則として主張されることには、どこまでも反対せねばならぬ。（中略）人類の両性関係は個人的性愛を否定して、単なる性的衝動を主とする無制限の性交に向かって進

んでいるのであろうか。多くのいわゆるマルクス・ボーイ、エンゲルス・ガールでないしその亜流はコロンタイに従って、またはその説をさらに誇張しあるいは歪曲してそう信じているらしい」

山川は家族関係、親子の愛情といったものは、國家がなくなっても、最後まで存続しえる領域として把握し、コロンタイ的な「性的放浪生活」（山川）を不自然であると批判した。階級闘争が女性を解放すると唱え続けてきた、公式的なマルクス主義者である山川がコロンタイの女性論に否定的な態度をとるとは、筆者にも意外であった。が由緒ある武家の血筋をひき、いえ意識を比較的強くもっていること、自らも子供を産み育て家庭と両立させながら活動を行なっていることといった山川の生い立ちや経歴から培われた心情が、ゲニアのような女性に対し否定的な態度をとらざるをえなかったと思われる。

また平塚らいてうは、コロンタイ旋風が去って数年してから、『女性共産黨員とその性の利用——主義貞操の問題』（二九三三）の中でゲニアの問題を蒸し返している。共産黨員の女性のスキヤンダルが新聞紙上に登場、女性黨員が資金調達のために性を売ったとか、黨員幹部や黨員との同志愛と称する複数の性愛関係などが話題となった。むろん共産党はデマであると抗議したが、平塚は「ある程度には信じないわけにはゆかない」という立場から、ゲニア的な女性黨員のあり様を「男性の瞬間的なたんなる性欲満足に好都合のよう

な性思想」と批判した。そしてコロンタイの恋愛思想にふれ、ゲニアのような女性を「性欲満足」「男性思想の奴隷」と述べて、否定した。『赤い戀』は近頃讀んだ小説のうちでもつとも深く身にしむものでした。新ロシアの社會や人間についていろいろ知ることが出来たといふ興味以上に、そこに描かれた女性の生活、殊に性生活によつて提出された多くの問題は、同時に今日の日本の女性の問題として人事ならず考へさせられることが多いでした。」（東京朝日新聞、一九二七・一二）とあるように『赤い戀』に好意的な平塚であったが、ゲニアに対してこうまで否定的なのは、ゲニアが仕事のために子供を墮胎することを当然の権利と主張していることも関係していると思われる。

平塚は母性を生命の源泉と考え、恋愛の帰結として妊娠、出産を位置づける人であったから、ゲニアのような恋愛遊戲は結局は男に都合のよい思想にすぎないと批判するのも当然のことであった。確かに恋愛ゲームのパートナーが、経済的にも精神的にも自立し、フリーリングがあればすぐに深い関係となることを許し、避妊に失敗した場合も自分で始末してくれ、結婚をせまらないような女性であれば、男性にとってこの上もなく都合がよいことは自明である。実際、エロ・グロ・ナンセンスといわれた時代に都会で練り広げられた恋愛遊戲の帰結が何であったのかは、胎児や私生児の処置について身の上相談所にやってくる有職女性の数の多さが物語っている。

また日本の女性解放思想は、女権より母性を重視する傾向にあるが（拙著『高群逸枝論—母のアルケオロジ—』『日本女性解放思想の起源—ポスト・フェミニズム試論』参照）、一九三二年以降は、特に母性主義が台頭してくる時代であったことも、平塚のコロンタイズムに対する否定的な態度に影響を与えたものと考えられる。

3、林房雄と高群逸枝のコロンタイ論争

一九二八年五月八日の朝日新聞の新刊良書推奨で、高群逸枝がコロンタイの『恋愛の道』（林房雄訳）の書評を行なった。彼女は「色々な男と、ただ彼等が氣に入りさへすれば、彼等を愛してゐなくとも構はずに關係を結ぶ」といったゲニアの行為を批判、伊藤博文の「ただ氣に入りさへすれば、それがどんな女であらうと、愛などといふ問題にかかはりなく、關係をつけた」という言葉を援用し、コロンタイの恋愛觀を「ブルジョア政治家と同意見のもので、新しい戀愛觀などいふべきではない」と手厳しい批判を行なった。

これに対し、林房雄は『中央公論』（一九二八・七）にて「新『戀愛の道』——コロンタイ夫人の戀愛觀」といった論文を発表、「伊藤博文の場合には、女が單なる『美しい享樂物』に化せられ、そしておそらく女の方もそのつもりであつたことだ。が、それより重大なこととは、コロンタイがかかる戀愛觀の承認を、男性に對してだけでなく、特に女性に對して要求してゐることだ。この要求が實現される

ためには、従来の男の附屬品としての女が、伊藤博文とまでには行かずとも、少なくとも一般の男性と同等な「獨立人」「活動人」の水準にまで自己を高めてゐることを必要とする。一個の獨立人、活動人としての女性が、現實の社會に大衆的に出現してゐることを必要とする。」と述べて高群に宣戦布告した。

林はコロンタイの描く女性―ゲニアにしろワッシリッサにしろ―を「新しい婦人」「第五の型」とし、「獨自の内的世界を持ち、それ自體として價値をもつてゐる人間」「自己を主張する個性」「人格としての女」を大都市の鋪道を歩いているプロレタリア女性に見出そうとした。新生ロシアの社會主義に期待する林の情熱が、コロンタイの戀愛觀や女性論全面支持に向かわせたと思われる。働く女性、経済的に自立した女性を新しい生き方とする林の考えは、一見、進歩的に見えるのだが、果たしてこのような考え方は新しいといえるのであろうか。

たとえば、ゲニアのような女性は、元來、日本の男性作家の好みでもある。たとえば田山花袋の『蒲団』（一九〇七、明治四〇）では、『家妻』といふものの無意味を感じずにはをられない。時雄は、「ハイカラな新式な美しい女門下生」にあこがれていたが、イブセンのノラやツルゲーネフのエレネのように「女子ももう自覺せんければいかん。昔の女のやうに依頼心を持つてゐてはだめだ。」と女門下生を説教した。また有島武郎は『或る女』（一九一九、大正八）にて、

一人の男では決して満足することのない妖艶で氣丈な葉子に「新しい女」を見出しているし、小説の世界のみならず現實の生活においても、大正初期に「新しい女」の代名詞としてジャーナリズムで話題となった平塚らいてうと親交を結び、『青鞥』を支持した。谷崎潤一郎は『痴人の愛』（一九二四、大正一三）にて、白人のように色白で、男から男へ自由奔放に飛び回るナオミにモダン・ガールをイメージした河合讓治に、ナオミを教育させて教養を身につかせ、モダン・ガールに仕立て上げようとする作品を描いた。

ハイカラ女性も新しい女もモダン・ガールもすべて、欧米から輸入された女性像であり、学問や思想や技術やライフスタイルの舶來品が和式よりもてはやされるのと同様のレベルで、欧米型の女性がいつでも男性知識人を虜にするのであった。「殊にこのやうに日本もだんだん國際的に顔が廣くなつて來て、内地人と外國人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入つて來る、男は勿論女もどしどしハイカラになる、といふやうな時勢になつて來ると、今まであまり類例のなかつた私たちの如き夫婦關係も、追ひ追ひ諸方に生じるだらうと思はれますから。」（谷崎潤一郎『痴人の愛』）という小説の一文にも示されているようにモダン・ガールは近代化、歐風化の波の中で誕生した、最先端の流行であつた。モダン・ガールの原型は、アメリカの女性であつたが、一九二〇年代後半になると新生ロシアのブレタリア女性が最先端の新しい女性として、男性

知識人に支持されるようになる。林房雄のコロンタイズムもそういった時代風潮から派生してきたものと考えられる。

したがってマルクス主義大流行の一九二〇年代後半は、階級的自覚を持った職業婦人、ソウィエト型エンゲルス・ガールが、アメリカ型ブルジョア的モダン・ガール（高島素之は「文化過程より観たる現代女性」一九二五、大正一四『女性』九月号でモダンガールをヤンキーガールと呼んだ。）をしのいで、林房雄のような知識人の男性を悩殺することになるのは、当然であった。彼はコロンタイの恋愛観を絶賛する。「エロスに恵まれない冷かな夫婦の抱擁」でもなく「賣淫」でもなく、「自由戀愛の空中樓閣」でもない、ゲニアのような自立した女性との「エロティックな友人關係」こそが眞の戀愛だというのだ。「美しく明るく何人をも傷つけぬ戀愛藝術。それが戀愛遊戲だ。それは決して單なるふしだらな淫蕩ではない。」センチメンタルな戀愛至上主義ではない戀愛遊戲はあくまでも私事であり、「彼の性生活は彼一人のみの私事に屬する」（コロンタイ）故、誰にも束縛されることはないというのである。こういった戀愛観が「すでに男性の間には珍しくない考へ方ではなからうか」（林「新『戀愛の道』」）という疑問は、林も持っていた。だから女性こそがこのような戀愛観を持つべきだと彼は主張するのである。また結婚についても一生運ただ一人だけの配偶者と生活を共にしなければならぬことを林は「手品のやうな藝當」として退け、ブルジョア婚姻制を

否定する。

こういった林の進歩的な戀愛観に水をかけたのが、高群であった。「官僚的戀愛觀を排す―コロンタイ夫人の戀愛觀について」（『中央公論』一九二八・八）は、アナキストを自称した高群らしいエッセイである。林やコロンタイが男と女の關係に過剰なぐらゐに意味づけをし、共產主義における新しい道徳にそくした眞の戀愛を高らかに掲げる理想主義に傾きがちなのをみると、高群ではないが「不自然なものは、唯だ不自然である」といった心情的であるが素朴な批判が、わかるような気がする。彼女の論点は単純だが、根底的である。戀愛とは何ぞやなどとは考えなくてもよいという戀愛觀を持つ彼女は、林のいうような高度な心理現象たる眞の戀愛、教養や能力を必要とするような戀愛の存在をまったく信じない。「眞の戀愛」は「猫でも行なつてゐる。」と皮肉る彼女にとって、「自然のままの、素朴な衝動にまつ」「自然そのままの意志」が新戀愛の道であつた。この自然の意志を妨害しているいろいろな制度や作為をとりはらうことが解放された戀愛の道だというのである。そういった戀愛は男女平等等を掲げなくとも、「相互の尊敬に根ざしてゐる」と彼女は断言する。

高群は、コロンタイの戀愛觀は、女官僚、女支配者のものであつてブルジョアもプロレタリアもなく、單なる女權主義だと批判する。戀愛遊戲がそんなに新しいだろうか。コロンタイの小説が好む美貌

の若い男、多感で多情でやさしい、被玩弄的な年下の男との恋愛遊戯は、「中性化した有閑婦人」「女學者」「女事業家」がいつの時代にも行なってきたことだと述べて、明治時代に多くの男妾を囲っていた女學者―高場乱子の例をあげている。また林がもてはやす、すばらしき職業婦人も「機械的な労働や事務にしたがつてゐる多くの婦人たちにとつては、その労働や事務は何ら名聲を伴ふものではない。彼女達は生活のために、生活の自由のために、さういふ労働をしてゐるし、進んではまた社會改革の運動をも生活本位の立場において起こすでありませう。その『生活』なるものの内容の中には、もちろん母性に關することも主な要素としてふくまれてゐるであらう」といった現実的な存在であり、ゲニアのように仕事のために中絶することを当然視するようなことはないと批判する。「紙上賣淫や戀愛遊戲や玩弄の風潮」の中での男化した女の戀愛觀には「不自然」さが目立つので、賛同できないという主旨である。

高群がコロンタイの戀愛觀に同意できなかったのは、そこに「男の論理」を見出したからではないだろうか。コロンタイは戀愛と生殖の問題をまったく切り離して考えていた。戀愛遊戲で万一避妊に失敗した時は、自己實現の妨げになる子供は墮胎するか、産みなければ、未婚の母になればよいというのだ。生まれた子供は社會の子供なのだから、共同保育所で育てればよいといったコミュニケーション思想が根底にある。高群は戀愛と生殖は不可分の關係にあり、妊娠、出

産までも戀愛の一部と考える。また生まれた子供は基本的に母の元で育てるのが自然だとする母性的な思想を持っている。高群には戀愛が單なる私事で、仕事の妨げになる場合には子供は墮胎すればよいといったゲニアのような女性は「男化した女」にしか見えなかったであろう。確かにコロンタイを支持する林の戀愛論も、男性としては進歩的であるにしても、妊娠、出産といった女性が抱えざるをえない問題に関しては、まったく触れておらず（気がつきもしないという感じなのだ）、新しい戀愛觀や男女の關係を求めることに性急なあまり、結婚制度否定、家族否定を觀念的に語りすぎる傾向にある。林の觀念的な論理が高群には「不自然」に見えたのだとしても不思議ではない。

高群が指摘した林の「不自然」さは、やがて「転向」という形で、彼自身の内的世界にいい知れぬ葛藤をもたらすことになる。マルクス主義はモダニズムの類型のひとつにすぎなかったのではないかという疑問を彼自身持つに至るのであるが、「マルクス主義は決して日本人の永遠の心の支柱となり得るものではない。十九世紀の西洋の階級社會に發生した一つの理論的獨斷にすぎない」（「轉向について」一九四一）という発言にもそのことが示されている。また後に述べるが、進歩的な林の女性觀も單なる流行に便乗したにすぎなかったのかと思われるほどに、転向と同時に一八〇度転換することになるのである。というよりも林の女性觀の変容こそが、彼の転向の

心髓を物語るものなのかもしれない。

4、武田麟太郎とコロンタイズム

武田麟太郎は、『1929』（一九二九・六）という文芸誌に「W町の貞操」という小説を発表している。新潮社版の全集や他の作家とともに彼の作品を断片的に集めた書物にもこの短編は、掲載されていない。武田としては、初期の作品であり、若くて性急なプロレタリア作家武田の左翼イデオロギーが生そのまま表現されている。臼井吉見の言葉をかりれば、「新しい人間タイプの創造でもなく、現実社会の照明でもなく、むしろ、そういう冷静なリアリズムが入りこむ隙もないような、せきこんだ」（『武田麟太郎論』『文藝』一九四六・六・七）作品の代表作が、この「W町の貞操」といってよい。

この短編には、二人の女が登場する。一人はれんという名の女で、子を身籠っている時に男が戦死したため、女手ひとつで息子を育ててきた。もう一人は息子の嫁で、東京の女子大を出た良家の娘。この二人の女を中心に、W村からW町へと産業の発展とともに「いくらでも大きくなつていく」町の情景が活動写真のようにスピードイーに描かれていく。武田の描く二人の女の生き方に、彼自身の左翼イデオロギーがストリートに現われている。彼は男に頼って生きていこうとするれんに対し、大変に批判的な書き方をしている。たとえば、夫の突然の戦死によって、妊娠している状態で軍用外套の

ボタン付けをして生活しなければならぬれんを「れんの生活は以前よりいけなくなつた。彼女を食はせてくれる夫がなくなつたからだ」と表現する。経済的自立をせず、結婚に頼っているえげつない女の姿の例としてれんを描こうとする。息子を育てている最中に、れんは洋服の仕立て屋をしている男の愛人となる、だがその男はやがて他の女と結婚、奇妙な同居生活を始めるが、れんはまもなく追いつき出されてしまう。息子は小学校を出て、工場に勤める。「お前は十七になつてもわたしを養ふこともできないのか」とれんは息子をせめて泣く。そしてまた生活のために若い仕立て職人といっしょになる。その職人も「貯金帳はもう残りわずか」となった頃、水死してしまふ。「彼はれん一家に奉仕して死んだといつてよかつた」。再び、れんは「生活費のために夫を探した。貞操と云ふことを彼女は考へたことはなかつた。今も彼女を食はせてくれる男が必要であつた。」息子が成長、兵隊から戻るとれんは、息子に嫁を貰つて、ゆつくり隠居生活を送ることを夢みた。だが息子はマルクス主義にかぶれた。「不幸者めが、不幸者めが。」と泣きわめくれん。

ところが「シュギ者」の息子には、意外にも女子大出の良家のマルクス主義にかぶれた娘が嫁にきた。喜ぶれん。しかしその嫁は、当時流行していたコロンタイズムにやられている、明らかにゲニアを意識して書かれたような女であつた。「嫁らしくない嫁」、息子の留守の時には他の「シュギ者」と夫に接するようにつきあふ不貞な

女。やがて嫁は家を出ていく。「あなたは家庭めいたものを持ったため、一日一日ダラクして来た。『家庭』の考へが、あなたをそれ程までに下らないものにするならば、あなたにとつて『家庭』は敵だ。私にとつては、もつと敵です。私達にとつて、それが敵ならば、私達はさつさと、別れた方がいいでせう。私はこの失敗によつて、以後、夫婦と云ふ關係に入りたくない。誰の妻でもない。誰の妻でもある。さやうなら」という手紙を残して。

この嫁を、武田は「新しい女」として評価し、れんと比較している。れんの貞操の基準は「生活費であり、子供の養育費」であつた。古い女は、結婚のために性を売っている売春婦であるが、今の新しい女は男に頼ることなく、自分自身の思想で生きており、結婚を生活の糧とはしないというのである。そしてれんのような女は、労働者とその妻たる「新しい女」の敵だと結論づけている。

こういった決して実在するはずはないであらう、観念の世界の産物である二人の面極端な女を、古い女／新しい女、結婚にすがる女／結婚しない女、自立していない女／自立した女、墮落的／革命的、日本の女／欧米的な女の二項対立の図式で表わし、後者、つまりコロンタイの描いたような女性を優位項に置くという構成をとっているが、それは武田が、マルクス主義者としてコロンタイの恋愛論に大変にかぶれていたことを示すものである。長髪姿で、「赤い恋」を片手に歩くのが、当時の文学青年やマルクス・ボーイの流行

のファッションだったことは先に示した。それと同様の意味で、文学青年達は、近代的な新しい女を小説に競って描こうとした。武田がこの時期にこのような作品を書いたのも、彼がフェミニストであつたというよりも、時代の流行に便乗したためであると思われる。

一九三〇年代になると武田は「日本三文オペラ」「市井事」を書き、井原西鶴の作風をつかむことによつて当時の市井風俗情景を描いた。民衆の愚劣さと打算と猥雑な姿を戲画的に描いていくのだが、「市井事」のお花のように勝気で、世話好きで、いじらしく、愛らしい女―きわめて古典的な―が自然に描写されている作品に接すると「W町の貞操」で示された、観念的で、すこぶるイデオロギー的な女性像とは、一体何だったのかと疑問に思つてしまうのである。彼も転向作家といわれるが、「転向」とは何かを検討しなす意味でも、コロンタイズムはひとつの重要な素材となることは確かである。

5、転向について

コロンタイの恋愛論の影響を受け、ゲニアを「新しい女」と絶賛した林房雄は、一九三〇年代に入つて、転向作家の代表的存在となつた。権力によつて強制されるためにおこる思想の変化とか、権力の上からの強制が転向の主因であつたとか、大衆からのマルクス主義の孤立感こそが転向の要因を作つた、といったような従来の転向

概念だけでは、林や武田の転向はつかめないのではないだろうか。

特に林の場合は、一九三〇年以降の作品や発言を見る限り、素朴な生活心情への傾斜や慣習的行為（ブラチック）への舞い戻りという感が強く、転向というものが、彼の内的世界において存在するのかないかすら疑問に思えるのだ。高群が林を「不自然」と批判したように、彼の内的世界では、マルクス主義も「新しい女」も一時の流行現象の渦中において派生してきた、実体のない観念の産物であり、「不自然」そのものだったのではないだろうか。

人は理論によって武装し、自己の行為を意味づけることはできて、理論そのものによって生きるということはない。生身の生活の「場所」では、むしろ意識せずにそう行なってしまうような慣習的行為（ブラチック）に依拠してしまうことが多い。つまり「自意識」からこぼれ落ちた無意識の領域である。その「場所」で自己が掲げる理論と平気で矛盾してしまっているということはよくあることだ。林は「マルクス主義は決して日本人の永遠の心の支柱となり得るものではない。十九世紀の西洋の階級社会に発生した一つの理論的獨断にすぎない。それは一つの主義であるかもしれないが、人をして喜んで死なしめる大義ではない。」（「転向について」一九四一）と述べたことは先にも示したが、ここで大義とは、「安心立命の地」、ナチュラな心情であった。三島由紀夫も「右翼とは思想ではなく、心情である」（「林房雄」「新潮」一九六三・二）と述

べているが、この心情は、無意識に行なってしまうような実際の、慣習的行為の場所から派生してくるものといつてよいだろう。（拙稿「転向文学と母——実際の行為の視点から——」月刊「アーガマ」一五号参照）この心情に身を委ね始めてから林の右傾化が際立ってくる。それを転向というのであるなら、林の場合、転向とは、本来の自分自身に戻ることをいうのであろう。

転向文学のテーマが「個人の生活」とか「母」とか「家」（故郷）であるのは、これらが自己の存立基盤でもある実存的な「場所」であるからだ。西欧のマルクス主義にかぶれた、彼ら自身はプロレタリアートではない、知的エリート階級に属する作家達にとって、転向は、観念に覆い被さった虚偽をはぎとっていく行為でもあった。それはある意味で恥ずかしい行為であり、「懺悔」や「うしろめたさ」や「告白」のスタイルをとらざるをえない。

林の『獄中記』第一部（一九三〇—一九三二）は、「転向に関する氏独特の臨牀記録であり、時代と知識人にこれが与えた重要な意味は、思想のコンフォミティーから隔離された人間にとって、転向は全く個別的個性的な、体験的で内的な問題だという、身も蓋もない正直さにあった」（三島由紀夫「林房雄」「新潮」一九六三）と評される作品である。林はその中で母や妻、子供達といった家族の細々した日常的なことをたくさん書いていく。ダンス・ホールに出かけていった妻に対して嫉妬と不快感を覚えた自分の感情の自己分析や、

母親が髪形を変えたのを見て、「三十年間育てあげてきた心の中の母のなつかしい型をこわされると、母そのものがこわされるようだ」と大変に嘆いた。ほんの一、二年前にコロンタイの恋愛観を絶賛し、男から男へと蝶のように舞い、仕事のために中絶を望むゲニアを新しい女と誉め称えた男が、まあなんという変身ぶりといいたくなるのだが、当の本人もそれを自覚していたのだろう、母の髪形を嘆いた後の文章で、「これは保守的な感情の一つであるが、かような保守主義は許されていいのではないだろうか」と述べているのだ。妻に対しても自分に対しては貞節であってほしい故、ダンス・ホールのようなところへ行っただけでも不快になるわけだが、ゲニアを絶賛した林としては保守的すぎるということもよい。「かような保守主義は許されてもいい」といった林の言葉は、コロンタイズムにあればどの影響を受けた林を知るものにとっては、彼の転向の本質を示すもののように思えてしまうのだ。

それでは武田麟太郎の場合はどうであろうか。同じ転向作家といっても武田は林の転向とかなり相違している。ともにプロレタリア作家であった頃、観念的な女性像を描いた彼らだったが、武田は転向後、江戸時代的好色もの、井原西鶴の世界まで日本回帰したせいもあるのだろう、逆に才能が開花し、庶民の女性像をリアルに描き出すことに成功したように思える。もともと日本の民衆の性愛関係というものは、なにもマルクス主義的恋愛観などという理論武装を

しなくとも、男も女も婚姻外の交渉を楽しんできたし、下層民になればなるほど、「家族」というコードを持たず、簡単に結婚や離婚を繰り返すなどルーズな婚姻関係を営んできた。その意味では、ゲニアのような多情多淫な女は、市井にうようよしていたといえる。

武田はマルクス主義イデオロギーから遠ざかり、自然体となった意識で生き生きと生きる庶民の女を描こうとした。これを転向というのであるなら、転向とは少なくとも彼にとってはプラスに作用したことになる。どこか不自然で観念的な「W町の貞操」の二人の女より、「日本三文オペラ」に登場するアパートに住む猥雑で、打算的で、狡猾なカフェの女給や女房連中の夫婦関係や男女関係のほうが、よっぽど自然でリアルなのである。また武田は「現代詩」のかつ子や「情婦」の雪枝のように飲食店で普通に働く、どこにでもいる女性を描きながら、庶民の夫婦のあり様や家族の関係を浮きぼりにした。婚姻制度や家族を観念的に否定した「W町の貞操」の武田と違い、「現代詩」に登場するかつ子が、夫である「自分」以外の男性と関係を持つていることに嫉妬しながらも、またかつ子と姑の折り合いの悪さの板ばさみにあいながらも、家族の場所に依然と存在し続ける「自分」を描くといったように、単純にはいかない人間の日常生活の葛藤と弱さを示している。

「情婦」においても子供達を残して妻に先立たれた「地味で風采のあがらない」中年男である細谷が、飲食店で働く、「おむすび」と

いう仇名を持つ、「容貌の極めて醜悪な若い娘」と交際するようになり、やがて子供達をも含めた家族的な付き合いへと発展する様子を描いている。子供達と「おむすび」が遊園地へ遊びに行き、うち溶けて母と子供のように遊ぶ姿に「——子供たちの母親がある、ここに、……ふつと細谷は眩しい空に向けて眼を瞬いた。」そしてベソチで幸せそうにうたたねをする細谷が、子供の「お父さん」という声にまぎって「おむすび」の「お父さん」「お父さんたら」という声を眠ったふりをしながら聞いているところで物語は終わる。庶民の平凡な幸せ、父親にとって、母親や家族の存在が何たるかを自然に描いた作品となっており、「W町の貞操」に描かれているように、性急に家族や結婚を否定する姿勢は微塵もない。

武田の場合、林と違っている点は、庶民の生活の営みを描くことに成功しながらも、「——いいんだよ、どうせ死ぬんだから」（『現代詩』）といったような自暴自棄な主人公や、立身出世とは遠く隔たつて社会のすみでひっそり生きていくような男性を書き示すことが多い。彼自身がいかなる思想にも社会にもまた家族や夫婦にも、期待するものがないというように、どこにも居場所を見出せなくなっており、冷めた魂でこの世界の現象を透視しているといった冷徹さを感じるのである。かつて三島由紀夫は、武田について「『共感』についてすらストイック」な作家であると指摘し、「社会というものについて思想が教えた観念的構図を脱して、できるだけしたたかに、

箸にも棒にもかからぬほどリアリストになろうという決意を抱いたものらしい。そういう決意がなければ、こういう愚かさはかけない」（『武田麟太郎、島木健作』『日本の文学』一九六八）と述べたが、この指摘は的確で鋭いが、しかしいまだに知識人的である。ストイックという知識人—大衆の構図において、知識人たる作家が大衆に對しいまだに高みに立っている意識があることを示唆しているが、そうではなく、そういった構図を越えた地点で、武田は根源的に絶望しており、すべてに對し深い諦観の念があったように思える。

たとえば、「私は、今年は最も親しい友だちを二人までも喪つてゐる」という書き出しの、武田が三六歳の時の「好きな場所」（『改造』一九四四・一二）というエッセイにそのことがよく示されている。「不遇とは誰に遇しられることなのか、飛躍した云ひ方をするなら、小説家、誰が不遇でないものがある。氣持を知つて貰はうとして書いてゐるのに、これが却々通じない。何も抱いてゐるのが、深遠な思想だからと氣負つてゐるのではなく、表現のわざがまづいからと遠慮したくもない。小説の中身なんてものは、さうした運命を持つてゐるのではないか。たまに君の心持はよく判つたと肩を叩いてくれる感想も、大部分は誤解から出来上がつてゐる。四方八方よかれあしかれ、誤解の絲に引つ張られて、その危つかしい均衡のうちをやつと立つてゐるのが、小説や小説家だらう。」と述べる武田は、人と人とのコミュニケーションにおいて意味が他者に伝わる

とは限らないという懷疑の念を持っている作家であった。

また二人の親友の「見馴れた身体」が「ほんの少しばかりの骨になつて戻つて来る」火葬場でのリアルなまでの描写や「私はどこへ行くか。好きなところを歩けばいいんだ。」「いつ頃から私は墓場が好きになつたか」と述べては、「刑死者の墓地」や若くして死んでいった幕末志士の墓へ赴いて行く彼は、人間存在の無根拠性の認識を持つていたように思える。死―彼岸に対する憧憬、そこにしか自らの安息の場を見出せないでいたことは、戦後一年余りであつざりと死んでしまったその死に方に象徴されているように思える。少なくとも、林のように「かやうな保守主義は許されていいのではないだらうか」といったひらきなおりとも思える言葉は、記さなかつたのである。